



御神酒杵 (連雀町自治会蔵)

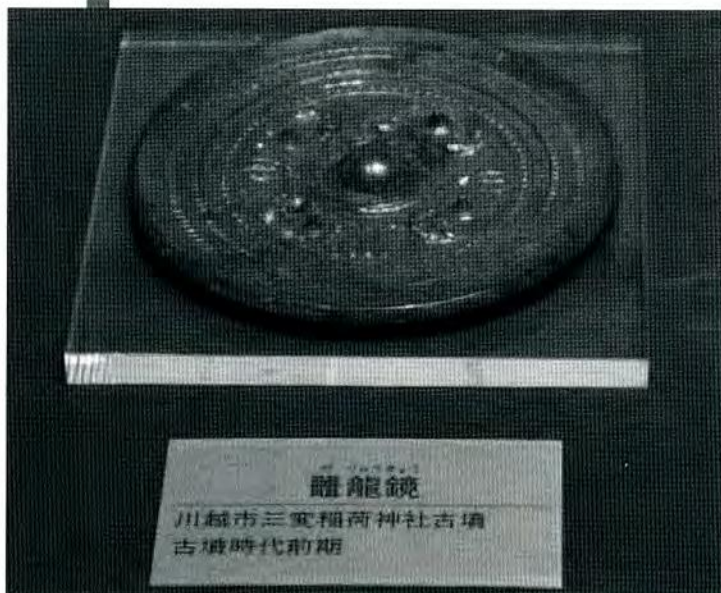
御神酒杵とは、大山参りに際して御神酒を持ち運ぶための信仰用具である。大山は神奈川県中部、丹沢山地の東端に位置する霊山で、江戸時代には関東を中心に大山講が広く組織され、多数の参詣者が大山に向かった。大山信仰にかかわる独特の用具として、奉納木太刀や大山灯籠などが知られているが、この御神酒杵もその一つに数えられる。歌川広重の錦絵「東海道五十三次細見図会 程ヶ谷」では、「大山参りの詣人」として、御神酒杵や木太刀を担ぐ人々が描かれている。大山参りに使用された御神酒杵は2基一対のもので、内部に神酒徳利や神酒樽を収め、天秤棒の両端に御神酒杵を通して運べるようになっている。形は社殿風の凝った造りのものが多い。

写真の御神酒杵は川越市内連雀町に伝来したもので、収納箱の墨書には「安政三年丙辰七月作之」とある。またそれとは別に、安政3年(1856)の「御神酒おみきわく隻造栄帳」1冊が残されている。造栄帳には、御神酒杵一対の代金25両や同彫物の追加代金3両2分など造営に要した費用や御神酒鈴・提灯・御札箱などの用具代など、総額50両余りの経費が詳細に記されている。

この御神酒杵は唐破風屋根の白木造りであるが、柱や胴周りには精巧な彫物が施されている。御神酒杵の一方には「東都彫工 嶋村俊表」の銘が刻まれている。嶋村俊表は江戸の彫物師で、川越氷川神社本殿や田無神社本殿(東京都西東京市)の彫刻を手がけたことで知られている。

博物館資料から 児童・生徒の見学学習のネタをさがして

— 鏡のはなし —



館内の展示状況

はじめに

当博物館では、市内の小・中学生に対して博物館での社会科学習を行っています。小学校6年生の子どもたちと実際にかかわる中で、展示物の中からネタが見えてきます。見学の前に学校の先生方と打ち合わせをし、どんな目的でどのように見学し、どのような力を育てようとするのか共通理解を図ります。見学する子どもたちに説明をしたり質問や疑問に答えたりする中で、思い付いたことや調べたことについて少し述べたいと思います。

さて、学校で学習した内容にかかわる実物を見付けさせるだけでなく、博物館で新しい発見ができるように子どもたちの学習を計画するにはどうしたらよいでしょうか。

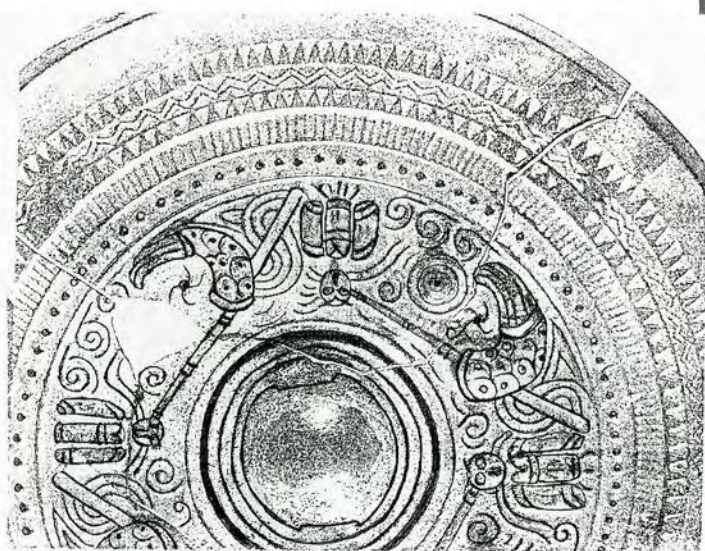
1 古代の鏡から何が見えるかな

本館にある古代の鏡は市内仙波地区の三変稲荷神社古墳から採集された鏡です。館内では古墳の石室に副葬される品々の一つとして展示しています。この鏡の名称は龍鏡りゅうきょうです。では、龍鏡とはどんな意味を持っているのでしょうか。博物館資料の

中でわからないものの一つです。

見学に来る学校の先生や子どもたちは「すごいなあ」とか、「鏡があった」と感想を持ったまま、通り過ぎてしまいがちです。「これで顔が見えるのですか」という質問を受けるときには、「展示している裏側が映るようになっていました。でも、今のように化粧に使うのではないようです。邪馬台国の卑弥呼が占いをしている場面が歴史の本に描かれますが、卑弥呼の脇に置かれて描かれる場合があります。そのような使い方がなされていたのではないのでしょうか」と答えています。田中琢氏は「日本では呪具としての鏡、権力を支える道具」として鏡を考えています（注1）。

さて龍鏡という意味にまで関心を持つことは稀なようです。ものの名前には意味があります。この場合も例外ではありません。「龍」とは、「わにの一種」（『新明解漢和辞典』三省堂）です。「龍鏡」とは、「古代中国の、鱗かみに似るといふ空想上の動物」（注2）です。また、龍鏡を「だりょう」と読み、「其形……龍のごとくにて、口大なり」（『日本国語大辞典』小学館）とあります。要するに龍鏡とは「ワニに似た大きな口を持つ龍」をかたどった図



龍と神仙像（コピーに加筆）

像のある鏡というのが、一般的な解釈です。しかし、そう見えた人はどのくらいいるのでしょうか。実は、私も見えない者の一人です。じっくり見えても見えてこないのです。

では、見えないのが当たり前なのでしょうか。この疑問に答えてくれる研究を紹介します。卑弥呼が中国の皇帝から銅の鏡をもらったように、鏡は中国から伝わってきたものです。漢の時代に中国で作られた鏡を中国鏡と言います。その後、日本の工人が中国鏡を模倣して作り、倭鏡が誕生します。しかし日本の工人は、中国鏡に表現された図像の意味を理解できずに倭鏡を製作したと言われてます(注3)。

初期の甕龍鏡には甕龍がしっかり作られました。製作工人が替わり、時代が下り、あるいは製作場所から離れるにつれて初期の図像の意味が不明確になり、甕龍が変化していったということだそうです。

では、三変稻荷神社古墳から出土した甕龍鏡からどんな図像が見えるのでしょうか。

実は、甕龍と神仙像が見えるのです。ここで見える甕龍について岡田賢治氏は、「頭部に巨を持った芋虫のような龍」(注4)と指摘しています。

この甕龍鏡を観察してみましょう。甕龍は体に鱗が描かれ、大きく口を開け、細長い棒のようなものをくわえます。尾びれが流れ、まるで鯉か鯰のような龍です。

神仙は、頭部の目鼻立ちがしっかりと盛り上がり、眉間には短いV字線が見えます。体は和服のように帯を締めています。また中国の女性の衣服のようでもあります。神仙像ですが、まるでカマキリのような風貌です。

三変稻荷神社古墳は、古墳が作られ始めた時期、つまり出現期の古墳として県内で著名です。埴輪のコーナーにこの古墳から出土した埴輪壺という埴輪が展示されています。馬や家の埴輪、円筒型の埴輪のなかでは異質です。一見すると壺に見えるからです。でも、その壺の底は穴があいているのです。なぜ穴のあいた壺をわざと作ったのでしょうか。おそらく葬儀に関するなんらかの儀式を行う道具として使われたのではないかと想像できるでしょう。このようにことも古墳を調べ、学習するときのネタにな

りそうですね。

2 鏡の使われ方

東京書籍発行の小学校社会科の教科書「新しい社会 6年上」では鏡が古墳の棺の中に豪族とともに納められた様子が想像図として描かれています。そこに描かれる古墳の棺の様子を見ると、豪族は頭部にきらびやかな金冠をかぶり、頭の下に4枚の鏡と右手側に二振り的大刀を置いています。

古墳の発掘調査例から復元する様子はとてもリアルに感じられます。

頭部に鏡が納められる様子は、鏡が人の顔を映すものであることが意識されており、何らかの行為が想定されると思います。鏡の呪術的な使われ方から日常的な使われ方に変化しつつある姿と言えるかもしれません。

死者は自分が生前使っていた装飾品をまとい、あの世でも現世と同じ生活を願うと言います。

当館では、この鏡のわきに三変稻荷神社古墳から採集された石釧や銀線で装飾された小刀と金の指輪を展示しています。小刀と指輪は市内牛塚古墳から出土したものです。豪族のきらびやかな暮らしが想像できます。

埴輪にしても然りです。豪族が身近に配した家来、遠い距離を移動する際に使った馬など、あの世でも生前の頃に劣らない生活ができるように古墳に納められたものなのでしょう。

豪族の身体に飾られたであろう管玉や玉、ガラス製の刺小玉なども展示していますが、見学する子どもたちにはとても興味深いものとなっています。

3 博物館での社会科学習

小学校学習指導要領から鏡の学習指導の在り方について考えてみます。6年生の社会科では、「内容 ア 農耕の始まり、古墳について調べ、大和朝廷による国土の統一の様子がわかること」が求められています。

子どもたちは教科書や手持ちの資料集から課題を見付け(あるいは提示され)、話し合ったり、調べたりする学習をすることで、米づくりのむらの様子や、豊かなむらの豪族が周りのむらをしたがえなが

ら王となり、国土が統一される過程を理解していきます。

各学校では、子どもたちや学校の実態に応じて教育計画を策定し、授業を展開しています。当館で行われる市内小、中学校の社会科学習の期間は主に6月、11～12月、1月下旬～2月です。各学校の希望を調整して実施となります。小学校6年生の利用では、6月と11～12月の二時期に分かれます。6月に来館する学校は原始・古代のコーナーの見学と、縄文土器に触れる体験をするなどが中心となります。11～12月に来館する学校は歴史の授業が終了する頃なので、全てのコーナーを見学する人が多いようです。学校や子どもたちの実態、教師の願いによって見学パターンは様々です。

市内の学校の先生方と見学前に打ち合わせを実施しています。学校からは実物を生徒に見せてほしい、何か体験をさせてほしいという要望を聞きます。

子どもたちが学習課題をこなすだけでなく、新たな意欲や好奇心を博物館見学で持たせたい。それには博物館職員が子どもたちの疑問に答えたり、ヒントを与えたり、賞賛したりすることが有効です。当館では子どもたちの学習のねらいや学習内容に応じてどんな学習や体験ができるのかを学校の先生方と共に考え、博学連携の体制づくりを進めています。

4 三変稲荷神社古墳周辺を歩こう

三変稲荷神社古墳のある仙波台地は、古墳群や住居跡の分布から仙波地区、大仙波地区、岸町地区に分けることができます。いずれの地区も台地の縁、いわゆる肩の部分にあたります。原始・古代から利水、排水のよい場所として人々の生活に適する場所であったのでしょう。

小仙波地区では、まず喜多院の境内にある慈眼堂古墳です。前方後円墳と推定されています。道路を隔てて日枝神社古墳があり、前方後円墳と言われています。三変稲荷神社古墳は方墳で、石釧、埴輪壺を検出。小仙波貝塚は昭和初年の調査時に淡水貝層が確認されました。現在は残っていないそうです。第一中学校校庭遺跡では奈良・平安時代の住居跡が多数見つっています。弁天南遺跡は古墳前期の方形周溝墓、古墳中期の住居跡を検出。弁天西遺跡は

古墳前期～平安の住居跡と中世の方形竪穴状の遺構が見つっています。小仙波4丁目遺跡は古墳前期の方形周溝墓と古墳後期の住居跡が見つっています。

大仙波地区では氷川神社古墳があります。愛宕神社古墳は母塚とも言われ、周辺に埴輪の小片が出土していますが、古墳からの遺物はまだ見つっています。浅間神社古墳は父塚と言われ、直刀、馬具、土器が出土したと旧埼玉県史に記載されています。

岸町地区では、城南中学校の東側斜面に岸町横穴墓群があります。古墳後期の横穴墓で、墳丘を持たずに斜面を利用して作られた古墳です。人骨、古代官人がベルトの留め金として使った^{かたい}鈔帯が見つっています。国道16号の北側では新宿2丁目遺跡。古墳後期の工房住居跡が見つっています。城南中学校の周りでは熊野神社西遺跡。古墳後期の住居跡が見つっています。ちょっとしたハイキングコースですね。

終わりに

博物館資料の中から学習のネタを探すと、まだまだたくさん隠れています。先生方に何度も来館してもらい、どんな資料が使えるのか、博物館職員と話し合いを持ったり、館内をじっくり見学してもらったりして学習の準備を整えることが大切です。当館では学校との連携を研究するため市内小・中学校の先生方で博物館利用研究委員会を組織して活動しています。成果は冊子「やまぶき」にまとめ、昨年度までに第七集を発刊しました。学校の先生方に研修場所として当館をさらに活用してもらい、学校との連携が深まるよう工夫したいと考えています。

注1 田中琢 1981年「古鏡」『日本の美術3 No.178』至文堂

注2 田中琢 1995年「竈龍鏡」『日本史大事典』平凡社

注3 八賀進 1991年「古代の鏡～その変遷と心～」『第4回企画展 美の先達者たち』川越市立博物館展示図録

注4 岡田賢治 1991年「埼玉の古鏡」『同上』

(教育普及係 馬橋泰雄)

分館だより

— 蔵造り資料館 —

展示リニューアル

このたび、蔵造り資料館二番蔵・三番蔵の展示をリニューアルいたしました。

ました。

二番蔵では、川越の大火（火事）に関する資料を展示していますが、これに蔵造り関係の資料を追加しました。この蔵造り関係資料の追加は、今後さらに発展させる予定です。

一方、三番蔵では煙草関連の資料展示を行っています。これにパネルによる解説を補足し、お客様の資料理解が容易になるよう図りました。

なお、こちらについても資料の追加を行っています。

また、三番蔵の資料に関しては解説シートも作成しました。このシートは、受付カウンターにおいて常時御希望があれば配布可能となっておりますので、御利用いただきたいと思っております。



変更後の展示室（三番蔵）



展示資料解説シート（配布用）

同好会の御紹介

【 博物館事業に協力して下さっている同好会の皆さんの、普段の活動を御紹介します。興味のある方は、一度のぞいてみてください。】

— 華の会 —

「私たち華の会は、機織り（裂き織り）の同好会です。

いろいろな素材の糸（絹糸、木綿糸、毛糸、麻糸）で、タペストリー、テーブルセンター、マフラー、ショール、着尺、帯などを織っています。また、藍染め、草木染めなどの染色もします。

一人一人、個性的な作品を作って楽しんでいます。作品を身に着けたときには、とても感激します。作品展も、今までに市内で5回開催しました。

博物館では、火・水曜日の午後1～3時に裂き織りの実演をしています。来館者の方も体験できます。（※会場の都合等により、実施しない場合もあります）」

入会御希望の方、大歓迎だそうです。実演の際などに、お声かけ下さい。





ほうじど 芳地戸のふせぎ

平成14年1月24日(木)までの展示

芳地戸のふせぎは、毎年春の彼岸の中日に市内笠幡の芳地戸地区で行われる行事です。市の無形民俗文化財に指定されています。

春から夏にかけては、害虫や疫病などの災いが地区内に入らないように、また入ってしまったものがすぐに出て行くようにと願う「ふせぎ」の行事が各地で行われています。芳地戸のふせぎもこうした意味合いを持つもので、享保年間から続くといわれ、古式をよく伝えています。

行事の当日は、芳地戸地区の人たちが鎮守の尾崎神社に集まって準備をし、辻札や神輿を作ります。辻札は、篠竹の先を二つに割ってお札を挟んだものと輪飾りをつけたものの2種類で、8組用意します。神輿は、藁で台座を作り、その上に白木の枠を載せて榊や檜の小枝を挿し、注連縄を張って竹の担ぎ棒を付けて中に御神体を納めます。

午後、神事の後に地区回りをします。行列は太鼓・幟・辻札8組・幣束・神輿・宮司などの順で、太鼓の音を響かせながら芳地戸の各戸を回り、無病息災を祈願していきます。かつては家の中にも上がったといいます。地区境では、辻札を立てて、厄病が入ってくるのを防ぎます。

地区回りを終えると、神社に御神体を戻し、直会をして行事は終了します。

常 設 展 示 室 か ら

氷川祭礼絵馬

(川越氷川神社蔵)

民俗展示室の展示ケース内には、ひときわ大きな絵馬があり、目を引きまします。これは氷川祭礼絵馬といい、天保15年(1844)に、鳶職一同が氷川神社に奉納したものです(展示品は複製)。縦152cm、横205cmもある大絵馬です。画面左下に記された銘から、渡辺雪溪の作と分かります。山車や人形、囃子連、町衆、鳶職などの様子が色鮮やかに描かれています。

画面は、十ヶ町の山車行列を表しています。下段左から始まり、喜多町(俵藤太)、高沢町(猿)、江戸町(岩に為朝)、本町(関羽と周倉)、南町(天の岩戸)の順に上五ヶ町が並びます。そして上段右から志多町(小槌珊瑚珠)、志義町(松に布袋)、多賀町(諫鼓)、上松江町(亀の上に浦島)、鍛冶町(小狐丸)の順に下五ヶ町が続きます。

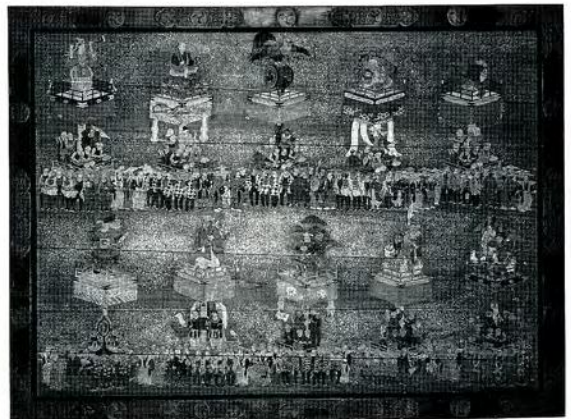
描かれた山車をみると、現在とは異なり、一本柱で上部に高欄がついて人形が乗る形式であることが分かります。また、お囃子は現在のような大太鼓・小太鼓・笛・鉦・踊り手の6人編成が8カ所で、残りは火焰太鼓と大太鼓のみとなっています。当時のお囃子が現在の様式に定着する過渡期にあったことが想像されます。

本絵馬は、文政9年(1826)の氷川祭礼絵巻と同様に、かつての祭礼の様子を今に伝える貴重な絵画資料です。

(背面に書かれた墨書)

天保十五甲辰年九月吉祥日

奉納 セハ人 □蔵 平五郎 栄治郎 幸右衛門
紋太郎 熊治郎 七五郎 巳之吉 平五郎
民五郎 善五郎 直治郎 吉五郎 虎松 伝治郎
藤兵衛 岩治郎 金四郎 □五郎 近治郎
市五郎
鳶連中



Information

平成13年12月～平成14年3月の予定です。

講) 座) ・ 教) 室) e) t) c) .

行 事	日 程	行 事	日 程
尺八と琴のアンサンブル ミュージアムコンサート	12/2 (日)	竹で作る水鉄砲など 昔の遊び	2/23 (土)
市内児童・生徒の絵画展示 わたしたちの川越を描く美術展	12/1 (土)～1/14 (月)	川越の近代 歴史講演会	2/24 (日)
伝統の技に触れる 子ども博物館教室 (後期)	12/16、1/20・27 (日)	野外博物館教室 「川越の石仏を訪ねて」	3/16 (土)
織りの変遷 機織り基礎講座	2/15・16 (金・土)	野外博物館教室 「城下町めぐり」	3/23 (土)

*変更の可能性もあります。

申し込み方法も含め、詳細については、「広報川越」を御覧下さい。お問い合わせは、博物館まで。

特別整理期間 平成13年12月17日(月)～21日(金)

資料整理のため、博物館は休館いたします。

ただし、川越城本丸御殿・川越市蔵造り資料館は、通常どおり開館します (17日は、定例の休館日)

・・・次回企画展のお知らせ・・・

第19回企画展「中世びとの祈りⅡ—板碑のある風景 (仮題)」

平成14年3月23日(土)～5月6日(月)

土 曜 体験教室

毎月第2土曜日、博物館で遊んでみませんか？

平成13年 12/ 8 火おこしに挑戦しよう

14年 1/12 博物館マップラリー

2/ 9 はかってみよう

3/ 9 手作りおもちゃ



火おこしに挑戦しよう

- 時間 午前10時～11時30分
午後1時30分～3時30分
- 場所 川越市立博物館体験学習室ほか
- 申し込みは不要です。当日、直接博物館へお越しください。
参加のための入館は無料です。

第12回ミニ展

むかしの勉強・ むかしの遊び

特別
展示
室
の
展
観

平成14年1月22日(火)～3月3日(日)

地域の人々の暮らしの移り変わりを生活道具・遊び道具等からたどる展示です。

昭和30年代の教室・居間・台所や駄菓子屋の店先の再現を行うほか、教科書やランドセル・文房具・電気洗濯機・白黒テレビ・ブリキのおもちゃ等を展示いたします。

わずかな間に見かけなくなってしまった品々が、いくつもあります。懐かしい品々と再会してみてください。



トピックス

博物館文化祭

11月3日(祝)、当博物館にて文化祭を開催しました。

当日は、民俗芸能「老袋の万作」の実演のほか、同好会の皆さんの御協力で、機織り体験(川越唐棧、裂き織り)、縄文土器の文様作り、古文書解読サービスなどが行われました。また、埼玉県立川越高等学校郷土部による展示もあり、会場は活況を呈しました。



利用の御案内

- ◆開館時間 午前9時から午後5時まで(ただし入館は4時30分まで)
- ◆休館日 月曜日(休日は除く)、毎月第4金曜日(休日は除く)、休日の翌日(土・日曜日は除く)、年末年始(12/28～1/4)、燻蒸期間(7月上旬頃予定)、特別整理期間(12月中旬予定)

◆入館料

区分	博物館	川越城本丸御殿	川越市蔵造り資料館	3館共通券 (博物館・川越城本丸御殿・川越市蔵造り資料館)
大人	200円(160円)	100円(80円)	100円(80円)	300円
学生・生徒	100円(80円)	50円(40円)	50円(40円)	150円
児童	50円(40円)	30円(20円)	30円(20円)	80円

●()内料金は、団体〔20名以上、1名につき〕の場合。

- 開館時間・休館日は、3館とも同様。(燻蒸期間・特別整理期間は博物館のみ休館)

交通案内

東武東上線・JR川越線 川越駅より
または西武新宿線 本川越駅より
東武バス 「札の辻」下車徒歩8分



発行日 平成13年11月30日 発行 川越市立博物館
〒350-0053 川越市郭町2丁目30番地1 ☎ 049-222-5399
FAX 049-222-5396
Eメール hakubutsukan@city.kawagoe.saitama.jp
http://www6.ocn.ne.jp/~kawahaku/